

金屋地区景観形成調査報告書

1. 金屋地区の概要

尾上町は今昔、米とリンゴが基幹作物の農業立町の町である。その主生産地が金屋地区である。当町には、蔵が334棟現存し、その94%が農家所有の蔵である。特に金屋地区(世帯数271)には78棟の蔵があり、密集している。

年代別には文久2年、1862年143年前に建造された蔵が一番古く、明治、大正時代と続く。終戦後(昭和20年)農地改革で農家は小作人から自作農となり、蔵を建てること目標に皆農家は頑張ってきた。蔵を建造する費用は当時で米百俵(1俵1,430円)と言われ、蔵に夢を託し自作農となった農家は先を競うように蔵を建て昭和20~30年代に建造ブームが起り、これだけの蔵の数となっている。

蔵の構造は、農産物の貯蔵施設と文庫蔵併用で、米とリンゴの貯蔵は1階、2階は大事なものを保管する場所として活用されてきた。リンゴは旧正月頃まで貯蔵しながら農家がリンゴ仲買人と価格交渉、売ることにより自ら努力し農業経営基盤確立を図ってきた。一様に農家は潤い、蔵の存在が嫁婿を貰う判断基準の一つとされ、蔵は商人も農家も繁栄の象徴でステータスであった。このように建造された蔵が他市町村にない農村景観となり、蔵並と農家庭園がマッチした素晴らしい農村景観を形成している。

2. 金屋地区の景観形成に関するまちづくりの経緯

1) 農業の近代化に伴い、農産物は収穫と同時に農協の貯蔵施設に搬入され、蔵は貯蔵施設ではなく物置庫となり、次第に所有者も地域住民もステータスという価値観が薄れてきた。当地域で生まれ育ち、暮らしていると、これだけ蔵があり、素晴らしい蔵並み、農村景観も見慣れた風景でしかない。当町では蔵の建造主、建てる職人もいない今日、蔵は少なくなっても多くなることはない。後世に残すべき建造物であり、文化遺産である。そういう視点から蔵保存と利活用を推進する組織の必要性、この実状を一人でも多くの方々に理解してもらうため、町内外賛同者26名で14年1月27日に当会を設立。15年8月12日NPO法人の登記、法人組織となり金屋地区を中心に活動している。

2) 設立以来、「蔵保存と利活用の促進、グリーン・ツーリズム事業推進基盤確立と事業の定着」を指標に、蔵の合同調査 蔵マップ・会報蔵ジャーナル発刊 蔵フォーラム開催 蔵・農家庭園ウォッチング開催 修学旅行農作業体験ファームステイ受入 蔵・農家庭園ウォッチングとブドウ・リンゴ・イチゴ収穫体験開催 蔵所有者懇談会・受入農家懇談会開催 古農具収集及び展示 蔵・蔵並み図画コンクール開催 地域案内人育成 金屋地区の景観形成調査など事業活動をしてきた。

3. 活動内容及び成果

1) 活動内容

蔵の合同調査：弘前大学農学生命科学部地域環境学科谷口建教授と学生の協力で14年3月に当町蔵（外壁・外壁の模様・扉・屋根の色・構造・所有者等）の3週間に亘って調査。この調査によって334棟の蔵の数が確定した。

蔵マップ発刊：合同調査のデータをもとに同年4月、当町「蔵歴史書」として千部発刊。

蔵フォーラム開催：蔵の保存と利活用・蔵並み景観形成等に関する基調講演やワークショップを開催し、蔵の保存と利活用への意見を集約。参集範囲は地域住民（蔵所有者含む）・学生・高校生ら町内外から毎回30～80人参加。

<p>17年1月 23日 尾上町金 屋町会セ ンター</p>	<p>蔵利活用ワークショップ（30人参加）蔵おこしによる地域活性化の方向性等を確認。 ワークショップ終了後、同会場で金屋地区景観形成協議会を開催し、体制表・会則・提言書等（フォーラムで谷口座長研究発表）協議。</p>	
<p>17年3月 6日 尾上町生涯 学習センタ ー</p>	<p>「蔵フォーラム」（町内外45人参加） ・研究発表【金屋地区蔵並みの新たな景観形成】 弘前大学農学生命科学部地域環境科学科 教授谷口 建氏 谷口教授より同地区蔵並通りのブロック塀を生け垣にする・屋根色統一等景観形成のC・Gで紹介。 ・蔵・蔵並図画コンクール作品展示・表彰式 地元小学校2校6年生120人の作品展示及び表彰</p>	 

蔵所有者懇談会開催：蔵フォーラムワークショップの意見や蔵の保存と利活用プラン・蔵並み景観形成等を周知し、蔵・農家庭園ウォッチング開催時の協力を要請する。

蔵・農家庭園ウォッチング開催：金屋地区の農村他市町村にない素晴らしい農村景観散策（蔵並み・蔵内部見学と農家庭園ガイド案内）で、農村アメニティコンクール優秀賞、農村景観百選、かおり風景百選指定の町のPRと地域住民及び蔵所有者の蔵保存と利活用への意識高揚等目的に開催。商工会との共催「蔵巡り・庭園巡り」事業に波及し、延べ日数10日で約3,000人の県内外から訪れるようになった。



16年11月20日	蔵・農家庭園ウォッチング（青森市内消費者48人参加）金屋地区の蔵内部見学（2ヶ所）・蔵並・農家庭園（5ヶ所）をガイド案内。 蔵の多さ、庭園の素晴らしさに参加者ら感嘆。農家蔵の町ブランド確立への取り組み。
-----------	--



蔵・蔵並み図画コンクール開催：蔵文化再発掘と継承を目的に地元小学校（2校）6年生を対象に同コンクールを開催し、当町民文化祭展示・同フォーラム展示及び表彰。



地域案内人育成講座開催：同ウォッチング時のガイド養成と当会事業関わり、人材育成を目的に弘前大学生や地元高校生を対象に4月下旬開催。



金屋地区の景観形成調査：弘前大学同教授と学生協力のもと実施し、貴重なデータを得ることができた。

金屋地区の景観形成調査の概要

(1) 対象地区の景観形成の現状と歴史的背景の調査

1) 金屋地区に現存する蔵の調査

尾上町には蔵が334ある。そのうちおよそ38%にあたる126の蔵が金屋地区に現存している。金屋地区において、蔵を所有している農家を対象に、築年数、構造、利活用など蔵に関するアンケート調査を実施した。蔵を所有する126戸の農家にアンケート用紙を郵送し、48戸の農家から回答を得た。回収率は38%であった。その結果について記述する。

蔵の築造年

48の蔵のうち55%が昭和に築造されている(図1)、ついで21%が大正時代、9%が明治時代となっている。最も古い1戸前の蔵は、文久2年(1862年)に築造されている。また築造年が不明な蔵が6戸前(13%)ある。蔵の築造年数の最も多い昭和時代について、さらに年代を細区分すると、戦後まもない昭和20年代が42%(蔵全体の23%)、ついで戦前の昭和元年から19年が27%(同15%)、昭和30年代が15%(同9%)で、この3つの時代で84%(同45%)を占める(図2)。

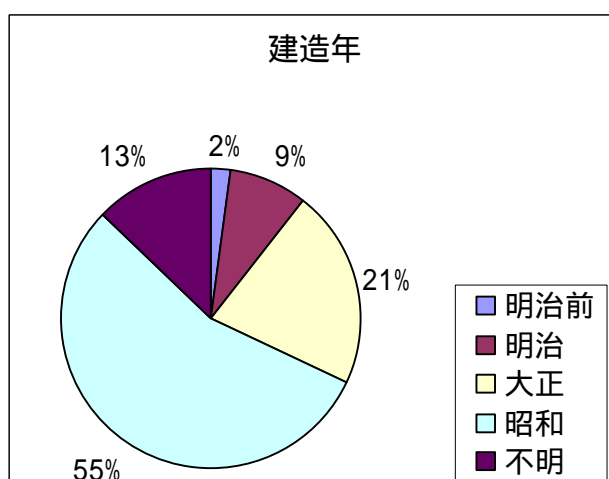


図1 建造年

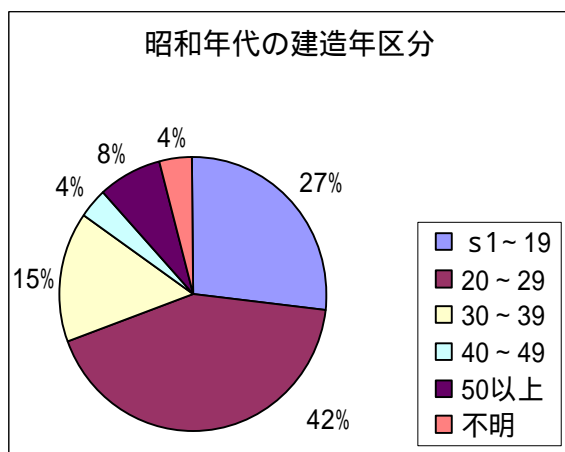


図2 昭和年代の建造年区分

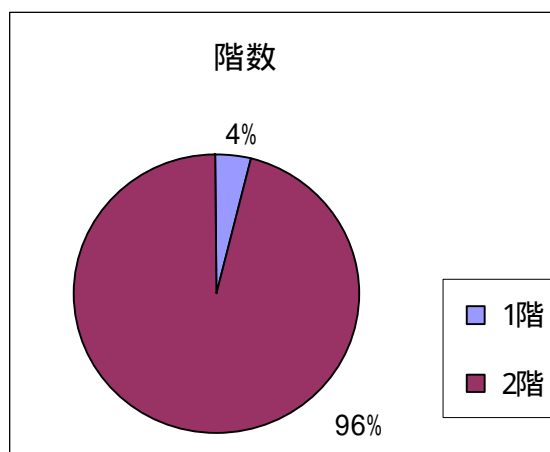


図3 階数

階数

2階建ての蔵が全体の96%を占める(図3)。

現在の利用状況

現在蔵に収納している物について質問したところ、タンスや瀬戸物類の収納に利用している農家が 90%（重複回答） ついで寝具や衣類の収納が 79%、物置代わりに何でも収納している場合が 71%、米やりんごの倉庫として利用している農家が 40%である（図 4）。戦前、戦後を通じて米やりんごの貯蔵に利用されてきた蔵は、戦後の農産物の増産政策のもと大量生産、大量貯蔵に対応した農業施設の大型化により、蔵は農産物の貯蔵という機能をほとんど失ってしまった。

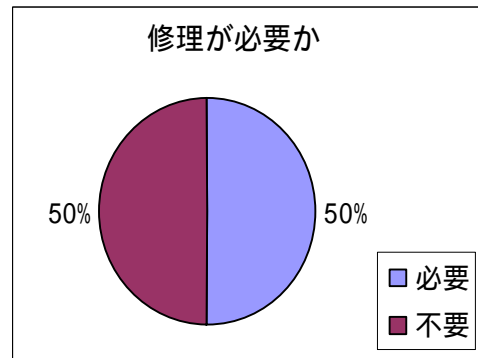
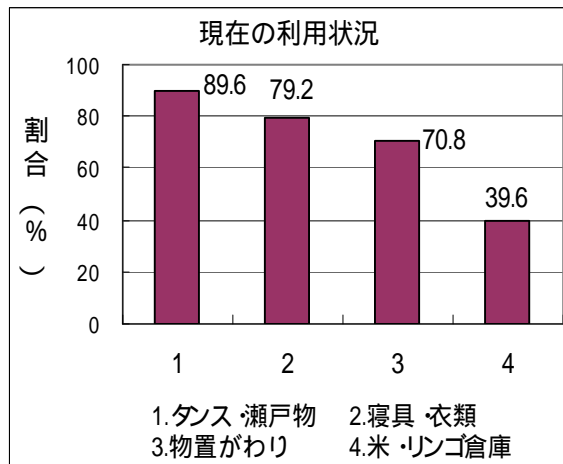


図 5 修理が必要か

図 4 現在の利用状況

蔵の修理

「蔵を修理する所がありますか」の問いに対して、50%の農家が「修理する所がある」としている（図 5）。「修理する所がある」と回答した農家が具体的に示した修理箇所は、外壁が 56%（重複回答）以下屋根が 36%、内壁・窓・腰壁がそれぞれ 16%、扉と内装がそれぞれ 12%である（図 6）。築造されてから 50 年以上経過した蔵は、風雨や積雪・寒気にさらされる外壁や屋根の老朽化が目立つ。

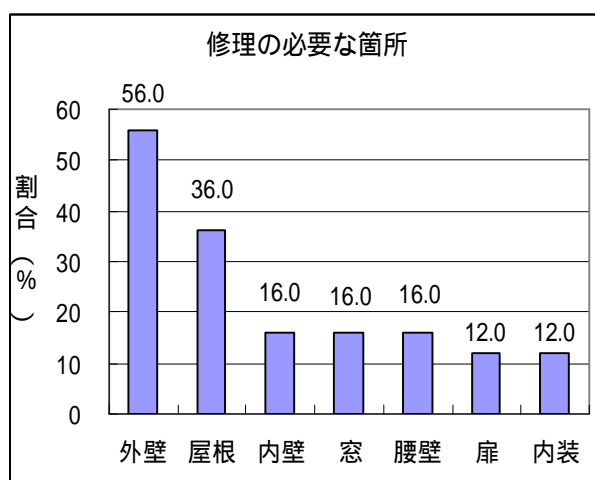


図 6 修理の必要な箇所

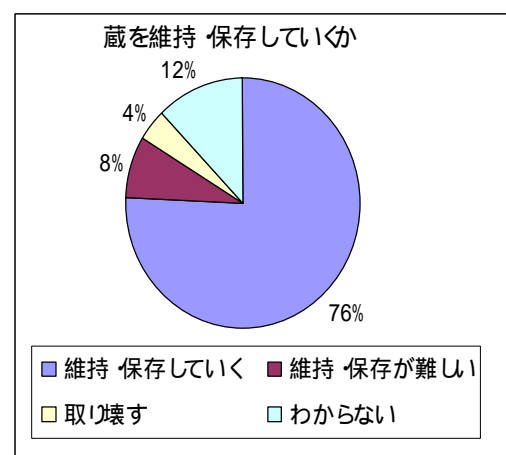


図 7 蔵の維持・保存

蔵の維持・保存

「これから蔵を維持管理しながら保存していきますか」に対して、「維持・保存していく」と答えた農家が76%にのぼる（図7）。収納の内容はともかくとして、蔵に対する愛着のあらわれと思われる。「わからない」が8%、無用の長物となって「取り壊したい」とする農家が4%ある。

維持・保存の問題点

蔵を維持し守っていくために、67%の農家が「維持費がかさむ」としている（図8）。また修繕するにしても「左官屋さんがいないので出来ない」が22%、「蔵を何に利用してよいかわからない」ので、維持・保全すべきか迷っている農家が22%いる。

蔵の活用について

これからの蔵の利用の仕方について質問したところ、現在と同じように利用する農家が圧倒的に多い（図9）。具体的には、「たんすや瀬戸物の収納」が77%、「寝具や衣類の収納」が75%、「物置代わり」が55%である。蔵を積極的な活用したいとする農家もいて、「蔵を開放して農機具の展示場やこみせ（喫茶店など）にしたい」と回答した農家が9%、「貸し倉庫にする」が2%あった。

ブロック塀について

蔵並みの景観を左右する要因のひとつであるブロック塀について、今後も「ブロック塀のままに」が多数の84%、「補助があれば生け垣にしたい」が8%、「わからない」が8%で、金屋地区の大部分の農家は、景観に対する意識を持っている人が少ないと思われる。

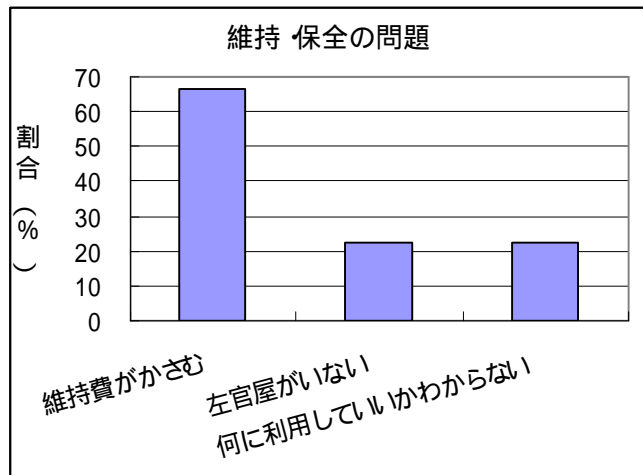


図8 維持・保全の問題

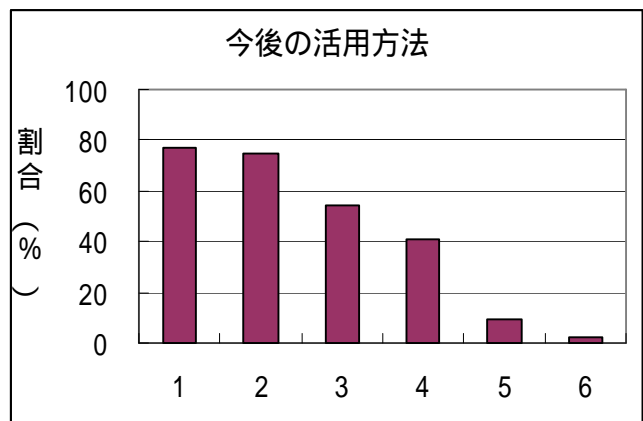


図9 今後の活用法

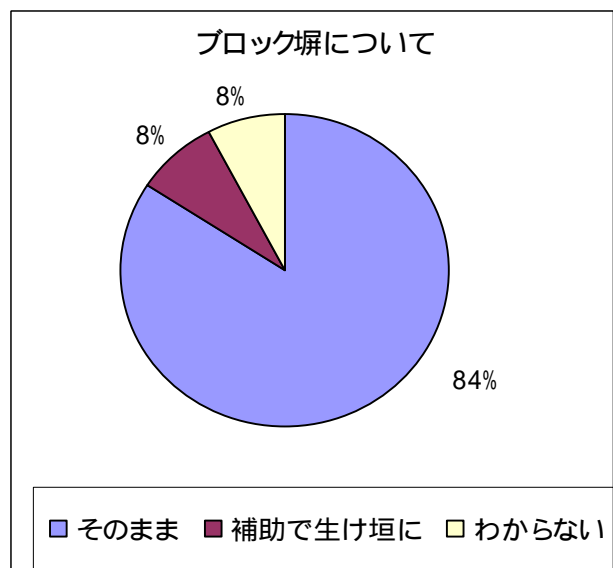


図10 ブロック塀について

2) 景観形成の現状調査

蔵並みの景観を形成する重要な要因である蔵の外観について、金屋地区の蔵 126 戸前すべてを調査した。その結果について記述する。

壁の色

蔵並み景観で、訪問者が一番先に認識するものが蔵の壁の色である。金屋地区の蔵の壁の色は、蔵並みに映える漆喰壁の白が 88%、ついで土壁の茶が 6%、灰色壁が 4%、ベージュ色壁が 2%である(図 11)。

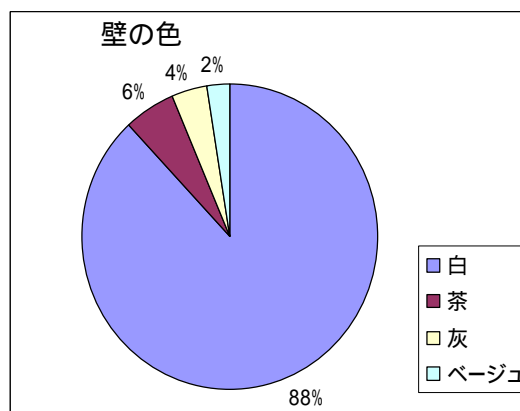


図 11 壁の色

屋根の接合形態

蔵本体と蔵を風雨や雪から防御する屋根の結合形態には 2 様がある。蔵本体と屋根が分離して、その間が空間となってい

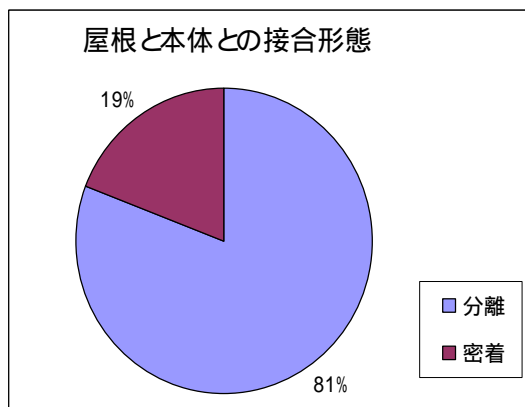


図 12 屋根と本体との接合形態

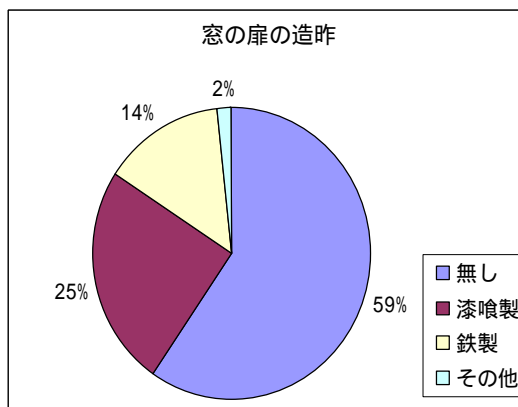


図 13 窓の扉の造作

る構造の蔵が 81%、蔵本体と屋根が一体となって密着している蔵が 19%である(図 12)。密着型は、昭和 30 年代以降に建造された蔵に多く見られる。

窓の扉の造作

窓の扉の無い蔵が 59%、漆喰製の手の込んだ扉が 25%、鉄版製の扉が 14%である(図 13)。

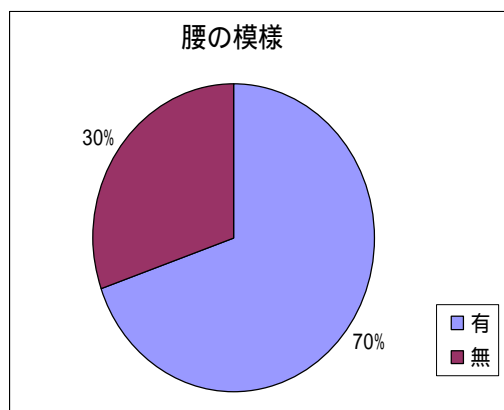


図 14 腰の模様

腰壁の造作

漆喰壁を風雨や特に雪の凍結融解による被害から防御するための機能が腰壁にあるが、蔵周辺の建造物や生け垣の色と調和した腰壁のデザインが多く見られる。金屋地区の蔵の 70%が腰壁に模様が施されている(図 14)。そのデザインは、石積形が 69%で大多数を占め、模様のない石 8%、菱形 7%、亀の甲形が 6%である(図 15)。

屋根の色

蔵の屋根の色は、さまざまである。一番多い色が赤で 53%を占め、ついで青色の 18%、緑色の 15%、最近は落ち着いた色彩の茶色が増えてきているがその割合は 9%にとどまっている（図 16）。これは昭和 50 年以降に建造された蔵が少ないことによる。

塀の造作

1)の で記述したブロック塀について、その数を調査した。ブロック塀は全体の 56%を占めている（図 17）。ついで境界の塀が無い農家が 28%、生け垣が 12%と少ない。尾上町の蔵所有農家のうち生け垣のある農家が 19%である。また生け垣のきれいな八幡崎では 27%の農家が生け垣にしている。このことから、金屋集落は尾上町の中で一番蔵の多い所であり、蔵並み景観を重視する観点からすると、ブロック塀から生け垣に変える方策を考える必要がある。

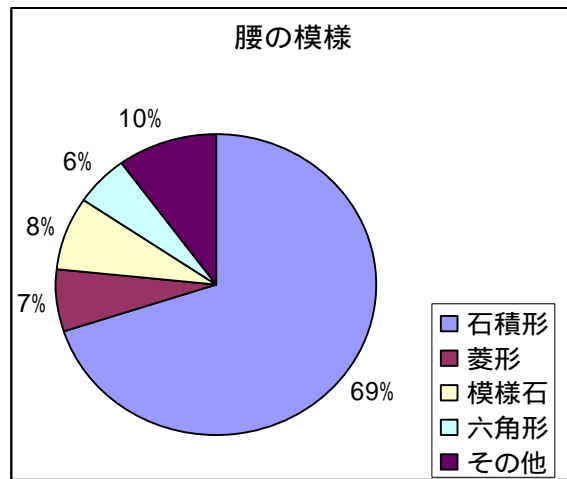


図 15 腰の模様

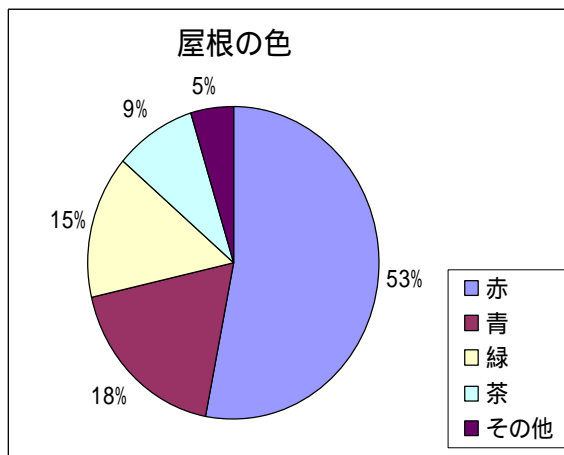


図 16 屋根の色

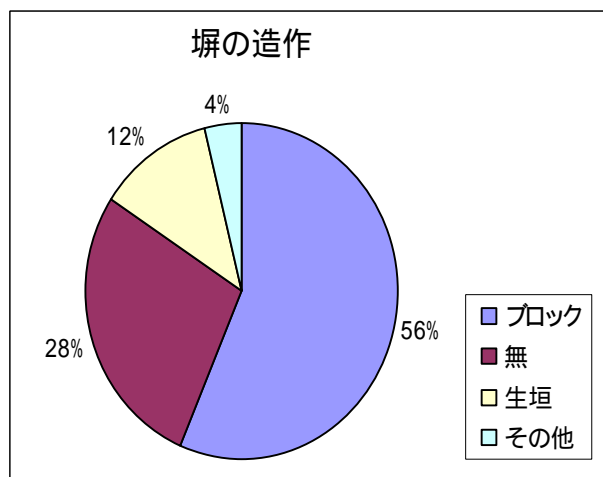


図 17 塀の造作

(2) 歴史的建築物の保存・活用方策の検討

蔵フォーラム開催

ワークショップからの提言を下記に記述する。

尾上町の蔵おこしによる地域活性化の方向

1) ハード面

1. 施設

蔵（保存・利活用）
生け垣・ブロック塀
道路・側溝・水路・
標識（案内標識）
トイレ
電柱・電線

2. 交通（巡回バス）

3. 情報発信（インフォ・メイションセンター）

2) ソフト面

1. 町おこしへの住民の意識向上と普及

2. 交流や地域資源発掘のための人材養成

尾上町の蔵おこしによる地域活性化について ワークショップからの提言

1. 蔵について

蔵の中を見学させ、規模や建築技術を知ってもらう

鏝絵の保存

沿道や蔵に通じる敷地内通路を花で飾る

蔵に合った樹木の選定と配置

蔵の屋根の色にこだわる。茅葺き屋根にする

蔵を紹介する案内板の整備

蔵の歴史（建築年、蔵の構造など）を調べる

蔵を守っていく人に資金的援助が必要

蔵の技術の紹介と蔵をつくる（修理・修繕）職人の養成

蔵の利活用（ライブ・名曲喫茶店・展示（農機具・生活用品・遊び道具・SP

盤・楽器）・レストラン・貸倉庫（年・季節ごとに）・宿泊・骨董や盆栽の展示・

アトリエ・武道・舞踏・ギャラリー・

お年寄りの遊び場（カラオケ）・蔵歴史博物館・

インフォ・メイションセンター）

蔵と農業を一体として取り組む

蔵のライトアップ

学校や家庭を通じて子供達に蔵の歴史などを教える

宝物の掘り起こし

* 蔵に対する農家の意識

使い勝手

- ・段差があって蔵の出入りが大変
- ・家と離れているので物の運搬が大変
- ・電気が無いので、夜用事ができない
- ・戸が重く、開けるのが大変

維持管理

- ・古くて修理が大変
- ・内装代がかかる
- ・掃除が面倒
- ・子供の頃、悪いことをすると蔵に入れるぞと言われ、印象が悪い

意識

- ・見せるという意識がない
- ・保存していこうと考えている人は少ない
- ・大切な物を蔵に入れておこうという意識は低い
- ・穀物蔵として使われてきたので入れる物がない
- ・蔵活用している他の地域を見学して蔵に対する意識を高める
- ・フォラムを開催して、蔵利用の意識を高める

その他

- ・個人所有なので、一般公開する時の保証はどうなるのか
- ・蔵を見せるとしたら、片づけるのが第1

2. 生け垣・ブロック塀について

生け垣を連続させて、景観に配慮する

ブロック塀を生け垣にする

蔵に合ったブロック塀にする

3. 道路について

蔵景観に合った道路の配色（石畳、グリーンサンド）

歩道の整備

蔵を中心とした散策路の整備

駐車場の整備

4. 水路について

蓋を取ってきれいな水を流す

魚を放流する

蓋をして歩道を整備する

5. 電柱・電線について

地中化する

6. 標識について

蔵の景観を考えて設置する

蔵に合ったもの（形・色彩）にする

案内標識を設置する

7. ゴミ置き場について

別な場所にする

目立たない形状（蔵の形）や配色にする

8 . 休憩施設などについて

適当なところ休憩する場所を設ける
トイレを設ける
飲食できる施設（蔵の活用も含める）を設ける
産直の施設を設ける

9 . 資金について

蔵マネ - の創出
寄付金を集める
一蔵運動（オ - ナ - 制度）
行政からの支援
グリーン・ツ・リズム参加費の一部を資金として運用
町づくりファンド（1口 円）

10 . 組織について

町内会を活用して体制づくりをおこなう
事務局の充実（民間、行政、大学）
ボランティアの組織化
町の観光行政・商工会と蔵利活用を連動させる
地元のちびっ子探検隊を組織
応援隊（町外で働く町出身者・町外の賛同者）の動員

11 . 情報について

体験学習を通じて口コミ宣伝
インタ - ネットによる情報発信
ホ - ムペ - ジの活用
道の駅に資料提供
観光情報誌に掲載
農産物販売網と提携
マスコミ（新聞・テレビ・ラジオ）に情報提供
会のかわら版の発行
行政などの広報誌への掲載

12 . その他

巡回バスを走らせる
蔵案内ボランティアガイドの養成
インフォ - メーションセンター - の設置
蔵のよさの勉強会
地元の人との交流を活発にする
人づくりと一体となって取り組む
食文化を守る人を育てる施設づくり
観光農業とグリーン・ツ・リズムを連動させる

尾上町金屋地区景観形成協議会設立:尾上町金屋地区にある農家蔵の保存と利活用を促進し、蔵並の景観や地区全体の農村景観維持、発展に寄与することを目的とし、弘前大学同教授を座長に(1月23日)体制及び会則・別添金屋地区の景観形成調査報告書を提言書とすること等を協議。

谷口 建	弘前大学農学生命科学部地域環境学科教授
月舘 敏栄	八戸工業大学工学部建築工学科教授
竹内 和男	竹内建築研究所代表
佐藤 雅秀	青森県職員
佐藤 俊英	尾上町建設課長
小野 正博	当会理事長
佐藤 正彦	当会常務理事

2) 成果

前述の活動が各社新聞掲載、NHK「東北各駅停車」・青森テレビ「らくてんスタジオ」・RABテレビ「喝采あおもり」放映などメディアに其の都度大きく取り上げられた。更には、垂柳・猿賀地区田園空間博物館整備事業において蔵利活用拠点づくり採択、農業高校グリーン・ツーリズム教科書「グリーンライフ」掲載・青森県労働金庫主催15年度「ろうきん1億円基金」奨励賞銀賞・財団法人明日の日本を創る協会主催15年度「ふるさとづくり賞」振興奨励賞・農林水産省第3回「村の伝統文化顕彰」農村振興局長賞・16年度あおもり活性化大賞奨励賞・16年度地域振興総務大臣賞受賞などが、域住民及び蔵所有者の同ウォッチング協力体制の確立・当会活動への理解・蔵保存と利活用への価値観共有・蔵並の新たな景観形成の指針等再確認が大きな成果である。

4・課題と今後の展開

1) 課題

蔵補修工事推進と財源確保:金屋地区11棟(当町全体で51棟)の補修工事費1千万円(当町全体で5千万円)の財源確保。

蔵利活用拠点づくり推進:垂柳・猿賀地区田園空間博物館整備事業・蔵利活用拠点が平成20年度完成予定。同ウォッチング開催時、古農具・生活用具資料展示蔵として2ヶ所を案内しているが、「農家蔵の町」ブランド確立には、現存の蔵をアート創作・展示蔵や軽食喫茶蔵・左官歴史蔵・イベント蔵等の拠点づくりが急務。その財源確保と更なる所有者協力体制の確立。

蔵並みの環境整備推進:蔵並みの側溝・ブロック塀改修工事の財源確保。

この課題解消に地域住民及び蔵所有者の自己負担で取り組むことは現状極めて困難である。

<尾上町田園景観形成への提言>

金屋地区を対象とした蔵の調査およびワークショップの結果をもとに、蔵並み景観形成方策の1つとして、既存のブロック塀の蔵並みを、コンピュータ・グラフィックの手法を用いて生け垣の蔵並みに変えた場合に景観がどのように変化するかを金屋集落の農家の方々に見ていただいた。この目的は、景観形成の重要性を実感してもらうと同時に、景観形成に積極的に取り組む農家の意識改革にある。

現在の蔵並みとコンピュータ・グラフィックで作成した蔵並みの写真を以下に示す。

A 変化前



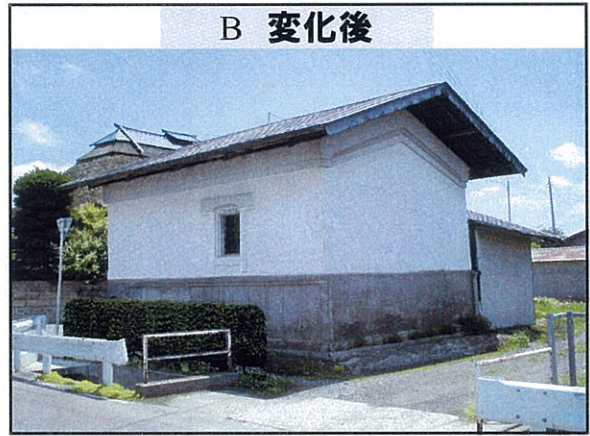
A 変化後



B 変化前



B 変化後



C 変化前



C 変化後



D 変化前



D 変化後



E 変化前



E 変化後



F 変化前



F 変化後





運営資金確保と有給スタッフ雇用等の課題が山積。オンリーワンの「農家蔵の町」実現に財源確保が大きな課題である。

2) 今後の展開

文化財指定登録調査実施及び文化財登録申請：農家蔵の文化財登録推進。

企業財団基金の活用：文化財保護事業の推進。

蔵利活用の拠点づくり、補修・蔵並み環境整備等の促進：行政へ景観形成調査報告提言書の提出。

修学旅行農作業体験ファームステイ受入・同ウォッチングとブドウ・リンゴ・イチゴ収穫体験等による自主財源確保の強化。

5・活動のポイント

活動の人材：弘前大学農学生命科学部・柏木農業高校・地元小学校等教育機関・地域住民との連携。

活動の資金調達：委託金・助成金（公共・民間含む）・寄附金・事業収入等。

活動のネットワーク・支援：グリーン・ツーリズム推進団体及びNPO法人・県行政との連携。

6・その他

業務委託を受けたのは今回初めてで、報告書類多項目に戸惑いと業務短期間・3月25日報告義務が3月決算の当会には大変な作業であったが、調査を終え蔵保存と利活用への方向性・景観形成への指針・課題等確認できたこと、教育機関・G・T推進団体・NPO法人・県行政との連携及び関わりが大事であることを改めて痛感する。

業務委託の機会を頂き、厚くお礼申し上げますと共に、御社様の益々のご発展をお祈りしつつ、金屋地区景観形成調査報告といたします。